

《 2011 年 地域連携シンポジウム 》

『医療・健康情報を考える in たかやま』開催報告

谷 澤 滋 生*

1. シンポジウム前日

2011年11月4日金曜日の午後3時過ぎ、高山市図書館から外に出ると、11月とは思えない日差しと暖かな風に包まれた。昼前、高山に向かう高速バスの車中から安房トンネルを出てすぐの平湯（温泉が有名、またいくつもの登山ルートに向かうバスの中継地）で気温25度を示す表示を見つけ、そのときから「インディアンサマー」という言葉が頭を離れない。

今朝、東京を発ち、明日のシンポジウム会場となる高山市図書館「煥章館（かんしょうかん）」で、午後1時から打保（うつぼ）館長、図書館スタッフの田近（たぢか）さんとの打ち合わせ、生涯学習ホールの機器や設備の動作確認等、前日の準備作業を終えたところだ。

この後5時過ぎに高山駅で明日のシンポジウムで座長を務められる日本薬学図書館協議会（以下、薬図協）の遠藤専務理事と待ち合わせている。今日の宿は、高山市図書館と駅の間であり、チェックインを済ませてから駅に向かっても十分時間に余裕がある。打保館長が勧めた高山市図書館に近い、「飛騨高山まちの博物館」に寄る。まだ新しい施設で、無料公開されている。広くはない敷地に高山の町屋が効率よく配され、順路にしたがって進んでいると、見所も多く1時間が瞬く間に過ぎた。飛騨高山の街並みを歩き、建物内のひと昔前の暮らしや調度類を眺めていると、4月

以降の高山訪問が懐かしく思い起された。

過去2度の高山市図書館の訪問は、いずれも2時間半余りの滞在時間で、今回3度目にしてやっと高山をのんびり楽しんでいる。4月23日の初めての訪問では、薬図協の平理事との二人旅を、満開の桜や溪谷が名古屋からの車窓を飾った。10時に高山駅で打保館長と待ち合わせ、12時半に見送られるまでの2時間半が高山での全滞在時間だった。その間に、いくつかの観光名所を車の窓から眺め、高山市図書館では会場の生涯学習ホールの見学、シンポジウムのコンセプト説明と高山での内容をどのようなものにするか意見交換を行い、最後に「高山祭屋台会館」見学をこなし、帰りの列車には昼食の駅弁（館長からの心づけ）を抱え飛び乗った。内容の濃い2時間30分の経験で、名古屋に向けての旅は放心状態の中で終わった。

2度目の高山市図書館の訪問は9月27日、新宿・高山間的高速バスによる谷澤一人の日帰り旅行となった。このときも高山の滞在時間は2時間半余り。この訪問では、4月の打ち合わせ結果や高山市図書館が開催している「市民の健康講座」で実施したアンケート、昨年の地域連携シンポジウムの経験および参加者アンケート等を考慮し準備したプログラム案の検討が目的である。

日程を確定し、プログラム案も整ったところで、広報が話題に上り、高山市の広報誌、タウン誌、図書館を含む市の施設、市内の薬局等を使った計画が提案された。すでに原稿締め切りが過ぎた市の広報誌に、至急開催案内の原稿を送る必要があることから、シンポジウムの名称をその場で決定したことなどが、懐かしく思い出された。

5時過ぎに遠藤専務理事と落ち合い、宿に

* Shigeo YAZAWA

東邦大学習志野メディアセンター/
日本薬学図書館協議会 教育・研究委員長
〒274-8510 船橋市三山2-2-1
E-mail: yazawa@mnc.toho-u.ac.jp

チェックインした後、夕食を摂りながら翌日のシンポジウムの進行方法等を打ち合わせた。そのとき、駅で気づいた大きく重そうなバックの荷物の大半が、今回のシンポジウム開催にあたり、遠藤専務理事が集めた関連資料であることを知った。今日の東京からの移動中にも、その資料に目を通してきたとのこと、自身の事前準備の手抜き加減を思い恥じ入るばかりである。

2. シンポジウム当日、午前

11月5日は肌寒い曇り空、予報では昼頃から雨とのこと。宿から高山市図書館までは十数分、そこを遠藤専務理事とのんびり、古い町並みや朝市に寄り道しながら向かった。到着時、図書館の開館時間にはまだ早かったのだが、すでに駐車場には車がちらほら並び始めていた。この駐車場は図書館利用者専用ではなく、市営駐車場として市民や観光客に提供されている。「煥章館」とよばれる高山市図書館は、木造二階建て、明治初期のフランス風建築の小学校を再現したもの。白を基調に淡いグリーンが縁取る概観は、瀟洒で落ち着きがある。内部は高山の地場産業である木材をふんだんに使い、暖かな温もりに溢れている。その図書館入り口には、すでに今日のシンポジウムの大きなポスターが用意されていた。

高山市図書館に入り、挨拶も早々に、シンポジウム直前の準備に取り掛かるが、昨日ほとんどの作業を済ませているので、残っている仕事は少ない。今朝、名古屋を発った当日組みの到着を待つことになり、その間じっくりと館内の見学をさせていただいた。

高山駅に11時着の平理事、愛知医科大学で日本医学図書館協会理事の坪内さん、同じく愛知医科大学の市川さんが到着し、会場が急に活気づく。同じ列車に岐阜から乗車と聞いていた国立がん研究センター若尾先生は、みんなが気をもむ中、かなり遅れて会場に到着し、これで今回のシンポジウムの役者が全員揃った。早速、昼食を摂りながら最初で最後の全体打ち合わせが持たれた。

3. シンポジウムは始まらない

当日用意された資料も並べられ、PCには全員のプレゼンテーション資料を用意し、テストも終了した。しかし、シンポジウム開始の13時は間もなく、という時間になっても会場の生涯学習ホールには参加者がちらほら居るだけ。今回のシンポジウム開催にあたっては、高山市図書館の全面的な協力をいただき、市の広報誌への開催案内掲載、ポスターとチラシの配布（特にチラシは500枚作成）と積極的に動いていただいた。シンポジウムの共催となり、また地元の医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護師協会からの後援も得ることができた。万全の準備で「地域連携」の名に恥じないシンポジウムが実現したはずなのだが…。

改めて説明すると、この地域連携シンポジウムの「地域連携」には、二重の意味がある。つまり、医療・健康情報を軸に、①大学図書館等の専門情報機関が地域の医師、薬剤師、看護師等の医療従事者への情報提供サービスを行うこと、②大学図書館等の専門情報機関と公共図書館との連携により市民・患者への情報提供サービスを実現すること、③その地域連携のきっかけ、起爆剤となることである。

11月5日の日曜日、つまり紅葉シーズン真っ只中の観光地高山でのシンポジウム開催は、無謀であったようだ。図書館を囲む駐車場は昼前から満車となり、駐車場に入れない車が道路に溢れ、駐車場の空きを並んで待っている。高山市図書館のスタッフがその列から市内ナンバーの車を見つけては、シンポジウム参加者であるか確認し、職員用駐車スペースに誘導するという地道な作業にあたり、何名かのシンポジウム参加者が開始に間に合った。

4. 地域連携シンポジウム

予定の13時に10分ほど遅れ、国立がん研究センターがん対策情報センターの若尾先生の講演でシンポジウムの第一部が始まった。

今回のシンポジウムは三部構成とした。第一部は誰でも関心が高い「がん」を取り上げ、その情

報サービスについて『がん情報を活用しましょう—がん情報サービスと患者必携—』という演題でお話いただいた、参加者の動員も意図した企画だ。昨年は同じ内容の講演を90分枠で行ったが、一つの講演としては長過ぎたとの反省から、今回は55分に短縮していただいたが、さらに開始時間を10分ほど遅らせたため、今回担当した若尾先生は時間で大変ご苦労されたようだ。

第二部は、薬図協、医図協から3人の講師が20分前後の枠で話をした。最初に谷澤が『医療・健康情報を読み解く』というタイトルで、医療・健康情報の特色について、後続の講師の話がわかりやすくなるよう露払いの役割を担った。続いて、平理事は『地域における医療・健康情報の提供』というタイトルで、この地域連携シンポジウム実施のきっかけとなった調査研究の結果から、北海道札幌市を中心に実施しているさまざまな事業を紹介した。また、最後に、愛知医科大学の市川さんより、『医療・健康情報へのアプローチ—市民の自立を目指して—』というテーマで、愛知医科大学と近隣公共図書館で実施している地域連携事業の報告があった。

第三部は『医療・健康情報と地域連携—情報の確かな提供と入手のために』をテーマにした参加者とのディスカッションが、遠藤専務理事を座長に開催された。シンポジウム参加者数は17名と期待したほどには集まらなかったが、ディスカッションは座長の巧みな進行により、途切れることなく質問、意見が続き、つつがなく予定した終了時間の16時15分を迎えることができた。この終了時間は、高山駅発、岐阜・名古屋方面行きの列車に合わせ設定したもので、残念ながら引き延ばすことはできない。シンポジウムは遠藤座長のまよめの言葉で無事終了した。

シンポジウム終了後も、時間に余裕のある参加者に講師が囲まれ、質問や名刺の交換をする姿が見られた。シンポジウムの成果を実感できた瞬間である。

5. 課題は山積

シンポジウム開催の目的は、医療・健康情報について地域の連携を構築することである。その意

味では、今回の参加者が17名で、その多くが図書館、病院図書室関係者であったことは、楽観できないが、参加していただいた方々には主催者の意図が確実に伝わったと信じたい。

高山市図書館では2011年から、市内の病院と連携し「市民の健康講座」を月に1回ほどのペースで月曜の夜に開催している。各回、病院から1、2名の医師を招き専門の疾病に関する講演を行っており、テーマによる多寡はあっても毎回30名前後の参加者がある。図書館を媒介とした市民と病院の連携は始まっており、今回のシンポジウム開催は、タイミングとしては悪くない。この関係に大学図書館、公共図書館、病院図書室が加われば、理想とする連携が実現する。今後の見守りと、適切なフォローアップが必要となる。

プログラムについては、先の「市民の健康講座」参加者へのアンケート結果もふまえて企画したこともあり、内容、時間配分に関しては概ね好評であったが、惜しむらくは、高山市図書館を中心とした積極的な広報活動にもかかわらず参加者数が伸びなかった。原因は、①秋の観光シーズンに開催日の土曜日午後が重なったこと、②高山市が日本一広い面積を持ち、市民の移動手段が自家用車でありながら、駐車場が昼前には満車であったこと、③市民に今回のシンポジウムの趣旨（市民、患者も対象者であること）が伝わらなかったことを挙げる。特に、月曜日夜の「市民の健康講座」の参加者数にも及ばないことから、①と③が今後の参考にならう。例えば、シンポジウム名称にわかりやすく『市民・患者、医療従事者、図書館関係者による地域連携』のように、長くなっても具体的に記述することも検討すべき事項である。

最後に、4月の訪問から11月のシンポジウム終了まで、長期間にわたり、一緒に働く機会をいただいた高山市図書館の打保館長、田近さん、およびスタッフの方々、積極的にシンポジウムを支えていただき感謝いたします。また、8月、9月と薬図協の他の研修事業に追われていた時期は、当方の対応が後手に回ることも多く、ご迷惑をおかけいたしました。

さて、2012年度の地域連携シンポジウムは静

岡で開催する予定です。皆さんの参加をお待ちしています。

『医療・健康情報を考える in たかやま』開催概要

日時：2011年11月5日(土) 13:00~16:15

会場：高山市図書館「煥章館」

(〒506-0838 岐阜県高山市馬場町2丁目
115番地)

<http://www.library.takayama.gifu.jp/>

主催：日本薬学図書館協議会

共催：NPO 法人日本医学図書館協会

後援：高山市医師会，高山市歯科医師会，高山市薬剤師会，岐阜県看護師協会高山支部

参加費：無料

プログラム：

開会 あいさつ，およびガイダンス
(13:00~)

第一部 講演会 (13:05~14:00)

座長：遠藤浩良氏/日本薬学図書館協議会専務理事

『がん情報を活用しましょう

—がん情報サービスと患者必携—』

講師：若尾文彦氏/独立行政法人国立がん
研究センターがん対策情報センター
副センター長

第二部 医療・健康情報と地域連携

(14:15~15:25)

『医療・健康情報を読み解く』

谷澤滋生氏/東邦大学習志野メディアセン
ター (JPLA 教育・研究委員長)

『地域における医療・健康情報の提供』

平 紀子氏/ヘルスサイエンス情報専門員
上級 (JMLA/JPLA 教育・研究担当理事)

『医療・健康情報へのアプローチ

—市民の自立を目指して—』

市川美智子氏/愛知医科大学医学情報セン
ター (図書館)

第三部 ディスカッション (15:30~16:15)

座長：遠藤浩良氏/日本薬学図書館協議会専
務理事

『医療・健康情報と地域連携

—情報の的確な提供と入手のために』

閉会 あいさつ

(原稿受け：2012.3.5)